

中国・日本における徐光啓研究：伝記・学術・信仰

史，習雋
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/27500>

出版情報：九州大学東洋史論集．40，pp.23-47，2012-03-31．九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：



中国・日本における徐光啓研究 ——伝記・学術・信仰——

史 習 隼

はじめに

徐光啓、字は子先、号は玄扈、諡は文定。教名は徐保禄（パウロ）。出身地により徐上海、官職により徐閣老等とも通称される。嘉靖四一年（1562）上海に生まれ、万暦三二年（1604）進士に及第した。官は礼部尚書兼東閣大学士に至り、太子太保の位を加えられ、文淵閣に列せられ、崇禎六年（1633）に没した。内憂外患の晩明時代に、朝廷の中枢にあって活躍した人物であった。

徐光啓は、中国に西洋科学を紹介した先駆者であるのみならず、中国におけるカソリック（天主教）の最初期の信徒の一人でもあった。彼は、明末に中国伝道を行ったマテオ・リッチ（利瑪竇、Matteo Ricci）を筆頭とする西洋宣教師らにしたがって西学を学び、西洋の著作を翻訳した。また宣教師らと協力し、西洋暦法によって『崇禎暦法』を編纂し、中国の暦法改革を推進した。同時に、宣教師らの伝道事業を熱心に援助して、明末天主教の「三大柱石」の一人と称せられた。また徐光啓が著した農書である『農政全書』は、中国のみならず日本と朝鮮にも伝播し、大きな影響を与えている。

徐光啓に関する研究は多様な分野におよび、彼の数学や農業、天文などの科学的貢献とともに、中国知識人によるキリスト教受容の典型例としても、多くの研究成果が蓄積されている。これまでの徐光啓に関する研究は、数百篇以上にも上る。さらに近年では、「徐光啓暨『幾何原本』翻訳四百周年」（2007年）や「上海開教四百周年記念」（2008年）等の一連の記念活動が開催され、『徐光啓全集』（上海古籍出版社、2010年）も出版されるなど、徐光啓をめぐる研究は新局面を迎えつつある。このため本稿では、徐光啓に関する基礎文献・伝記・年譜、および科学・宗教・中西交流などに関する研究動向を整理し、さらに今後の研究課題についても展望してみたい。

なお周知のように、徐光啓については前近代における中国人キリスト教徒の代表例として、欧米においても多くの関連研究が発表されているが、

本稿ではもっぱら中国・日本における研究動向に対象を限定し、欧米の研究成果については、漢訳されたものを紹介するに止めることにしたい。

一 著 作 集 と 伝 記

（一） 徐光啓文集の編纂

徐光啓は西学の翻訳のほか、数学、水利、軍事、さらには文学に関しても多く著述を残している。早くも明末には、各種の徐光啓文集がすでに編纂されていた。徐光啓の生前には、彼の軍事に関する著作を集録した『徐氏庖言』がすでに刊行されており、没後六年目の崇禎一二年（1639）には、遺著である『農政全書』が、彼の門人であった陳子龍たちによって編修・出版された。また崇禎一六年（1643）、陳子龍らにより編修・印刷された『皇明經世文編』にも、六巻の『徐文定公集』を含んでおり、徐光啓の遺文三三篇が収められている。さらに清代には、『測量異同』・『句股義』などの、徐光啓が著述あるいは翻訳した科学書が、『四庫全書』に収録されており⁽¹⁾、『農政全書』・『幾何原本』などの著作も刊行を重ねている。一方で強い抗清思想と民族感情を含む『徐氏庖言』は、乾隆年間に禁毀書となっている⁽²⁾。

また明末天主教の「三大柱石」の一人と称された徐光啓は、中国教会史においても重要な位置を占め、清末から民国年間には、教会関係者によって徐光啓文集が次々と編纂されている。まず光緒一六年（1890）、イエズス会士の李杕（李問漁）は『徐文定公集』四巻を編集し⁽³⁾、光緒二九年（1903）には、徐光啓の第一一世孫である徐允希が『徐文定公墨跡』を輯校している⁽⁴⁾。その五年後の光緒三四年（1908）には、徐允希は李杕の『徐文定公集』に基づき、家伝の疏稿等六三篇を加えて、『増訂徐文定公集』五巻を編集している⁽⁵⁾。さらに民国二二年（1933）には、徐光啓逝去三〇〇周年を記念するために、徐光啓の第一二世孫である徐宗沢が、徐光啓の遺文や遺詩を収集し、あらためて『増訂徐文定公集』を編纂しており、この際新たに収録された詩文は八九篇にも上った⁽⁶⁾。なお以上の三人の編集者は、いずれも天主教徒であり、しかも教会の重要な聖職を担当していたため、天主教関係の著作が文集の中心となったことには、留意する必要がある。

これに対し、中華人民共和国の成立後、学界では徐光啓の科学的貢献についての関心が高まっていった。まず1962年には、上海市文物保管委員会により、『農政全書』札記と家書を中心に編修された『徐光啓手跡』が出

版された⁽⁷⁾。1963年には、著名な文献学者である王重民が、徐光啓の奏疏・序・跋・論・説等の文章を、科学関係の著述を重点的に収集し、『徐光啓集』二冊を輯校・出版した⁽⁸⁾。この『徐光啓集』の内容は、従来の文集に比べて充実しているが、一方で徐光啓の天主教に関する著作は、ほとんど天主教信仰を宣揚するために教会が徐光啓に仮託したものとして採録されなかった。このように徐光啓の天主教信仰に対する懐疑的な見解は、当時の中国の政治的背景のもとでは主流であったが、後の学者たちからしばしば批判を受けることにもなった。

ただし以上の文集には、徐光啓の科学に関する翻訳がすべて収録されているわけではない。そのため1983年には、上海市文物保管委員会が上海図書館や北京図書館等所蔵の善本を収集して、『徐光啓著訳集』二〇冊(以下『著訳集』と略称)を出版した⁽⁹⁾。『著訳集』は、この時点で最も完備した徐光啓の文集であったが、発行部数が少なく、学界には必ずしも十分に普及しなかったが⁽¹⁰⁾、日本では榎一雄が『著訳集』の出版にいち早く注目し、その内容及び特徴を紹介している⁽¹¹⁾。

今世紀に入り、2007年には李天綱が『明末天主教三柱石文箋注——徐光啓・李之藻・楊廷筠論教文集』を編修した。李氏はこの『論教文集』において、徐光啓が天主教会のために書いた逸文が、刊本または写本として、次々とヨーロッパで発見されており、徐光啓の論教論文が多く存在していることを示し⁽¹²⁾、王重民編『徐光啓集』に未収録の宗教関係の著述数篇を『論教文集』に収録して、詳細な注解と説明を付している。

さらに2010年には、朱維錚・李天綱の両氏が、先行の文集に基づき、ヨーロッパ及び中国の図書館・資料館で新たに発見された著作を加えて、『徐光啓全集』(上海古籍出版社、2010年、以下『全集』と略称)を編修した。

『全集』には、徐光啓の翻訳をすべて収録するのみならず、王重民の『徐光啓集』に収められなかった宗教文献も収録している。また序文や跋文などの配列が原書の通りに戻され、さらに近年発見された遺文も採録されている。したがってこの『全集』は、現在最も網羅的な徐光啓文集であると言える。ただし『全集』も現在知られている史料のすべてを収録しているというわけではない。例えば、曾雄生が崇禎『松江府志』から発見した徐光啓の遺文「告郷里書」は、『全集』に未収録である⁽¹³⁾。今後もヨーロッパだけでなく、日本・中国に収蔵される文献から、新たに徐光啓の遺文が発見される可能性があるだろう。ともあれ『全集』の出版は、今後の徐光啓関連研究に、より一層の発展をもたらすものであることは間違いない。

（二） 徐光啓の年譜

徐光啓が逝去した後、その子の徐驥が年譜を著し、『徐氏宗譜』に収録した⁽¹⁴⁾。これはかなり簡略なものであるが、最初の徐光啓年譜として重要である。清末に『徐文定公集』が編修された際にも、『徐氏宗譜』の徐光啓年譜が移録された。2006年、中国国家図書館が出版した『明代名人年譜』にも、この年譜を収録している⁽¹⁵⁾。

近代に入って、1934年には徐景賢が『明賢徐文定公年譜初編』を編修し⁽¹⁶⁾、徐光啓の著作や奏疏、徐光啓に関する集序・伝記・書信なども附録として収録した。ただし徐驥の年譜よりは詳しくなったとはいっても、編修の際に参照された史料は限られ、事項の配列も十分に適切なものとはいえなかった⁽¹⁷⁾。その後、王治心・呉季桓・王重民の諸氏も徐光啓の年譜を編修しているが⁽¹⁸⁾、いずれも時系列順に徐光啓に関する大事を記すに止まっている。

ついで1981年には梁家勉によって『徐光啓年譜』が編修・出版された⁽¹⁹⁾。同書は徐光啓の年譜を中心に、徐氏の著作を一つ一つ考証し、関連する人物・出来事と対照し、注に詳細な説明を付している。また徐光啓の生前・死後に起こった徐光啓関連の記事も「譜前」「譜後」として収録している。この梁氏の『徐光啓年譜』は、当時としては最も完備した徐光啓の年譜であったが、王重民『徐光啓集』と同様に、徐光啓の天主教信仰については、史料の採録が十分ではない部分もある。

こうした状況をうけて、2010年に『徐光啓全集』が編修された際には、李天綱が『徐光啓年譜』を訂正増補している（以下『増補』と略称）⁽²⁰⁾。『増補』では、宗教関係史料と漢訳された西欧文獻を特に重視し、かつ大量の地方志中に収められる文獻を使用して、その内容を補充している。ただし『増補』でも、西洋宣教師らによる中国での伝道事業に関する文獻に残された、徐光啓関係の記事の収集はいまだ十分ではない。『増補』で主に参照されているのは、費頼之『在華耶蘇會士列伝及書目』（中華書局、1995年）である。また、裴化行『天主教十六世紀在華傳教志』（商務印書館、1951年）などの文獻も引用されている。しかし、参照すべき宣教師の著作は、ほかにも多くある。

特に、フランス人宣教師のオーギュスト・コロンベル（高龍聲、Auguste M. Colombel）は、『江南傳教史』第一冊において、徐光啓について相当詳

細に叙述している⁽²¹⁾。『江南伝教史』は、1550年から1900年までの350年間の宣教史について通論し、関連史料を豊富に収集・利用しているが、教会内部の出版社から発行されたため、学界ではあまり知られていないようである⁽²²⁾。このほかにも徐光啓の一族や交際関係などに関する漢文・欧文の関連史料は、なお相当に残されていると考えられ、このような史料を適切に収集・検討すれば、徐光啓の家系や生涯を更に詳しく考察することができるだろう。

(三) 徐光啓の伝記

徐光啓の最も早い伝記としては、彼の没後にその子の徐驥が著した「文定公行実」がある⁽²³⁾。また、イエズス会士のフィリップ・クプレ（栢応理、Philippe Couplet）も徐光啓の天主教信仰を中心として『徐光啓行略』を著した⁽²⁴⁾。清代以降、学者の関心は徐光啓の西学における貢献に集中していく。『明史』をはじめ、査繼佐『罪惟録』・阮元『疇人伝』に収録される徐光啓の伝は、すべて政治・軍事・天文暦法等の事績を中心として、徐光啓の功績を称揚するものである。清末民初、梁啓超や胡適等の学者も西洋科学導入における徐光啓の功績とそれが与えた影響に注目し、徐光啓を筆頭とする当時の知識人による西学導入への学術的思潮を中国近代思想の発端とした⁽²⁵⁾。

一方、天主教会も盛んに徐光啓の伝記を作成している。清末に神父李杓は「徐文定公行実」を著し、徐光啓の信仰を中心として、彼と利瑪竇らの宣教師との交際や、布教・護教への貢献について述べた⁽²⁶⁾。ついで民国二二年（1933）には、徐宗沢が『文定公徐上海伝略』を編修・翻訳し、徐光啓を信徒の模範として賞揚した⁽²⁷⁾。ついで1944年には、学者である神父方豪が宗教を含む様々な側面から徐光啓の生涯を簡明に紹介し⁽²⁸⁾、のち『中国天主教史人物伝』においても、徐光啓の家書と数篇の著述をめぐって考察を加えている⁽²⁹⁾。同じく学者である神父羅光も若干の欧文資料を参照して、『徐光啓伝』を著した⁽³⁰⁾。以上に述べてきた教会の識者らによって作られた伝記は、その内容のすべてが天主教の宣揚を主眼としているわけではないが、内容が徐光啓の宗教信仰や布教への貢献に偏重していることは否めない。

一方で、教会関係者以外の中国の学者たちは、徐光啓の宗教信仰者としての側面を無視し、あるいは彼の入教動機に疑問を抱く傾向が強かった。清末に黄節が提示した、「蓋し陽に其の教を尊びて、陰に其の数の取り、

以て己が用と為す（蓋陽尊其教、而陰取其象数之学、以為己用）」という見方は、その典型である⁽³¹⁾。王重民も同様の見解を示しており、徐光啓は本格的な天主教信徒というよりも、むしろ西洋科学に憧れた中国の科学者であったと論じている。当時の中国では政治的背景もあって、徐光啓を愛国的な科学者として宣揚する研究が多かった⁽³²⁾。例えば竺可楨は、徐光啓をイギリスのフランシス・ベーコンと対比してその愛国思想を高く評価している⁽³³⁾。

これに対し、同時期の日本人学者による徐光啓の評伝では、彼の宗教信仰を特に重視している。例えば後藤基已は、明末の奉教士人の典型として徐光啓について詳しく叙述し、また上海の開教をめぐつても、中国学界が徐光啓の宗教信仰者としての側面を軽視するのに対し、徐光啓の敬虔な奉教者としての一面を提示している⁽³⁴⁾。

なお1980年代の中国では、朱伝誉等が五六篇の徐光啓の伝記を収集して、『徐光啓伝記資料』二冊を出版し⁽³⁵⁾、呉季桓も徐光啓の家系・奉教・入仕などについて概述している⁽³⁶⁾。また1983年には『徐光啓生平及其學術資料選編』が出版され、いくつかの重要な研究資料を紹介するとともに、その生涯についても記述している⁽³⁷⁾。

そして2006年には、『中国思想家評伝叢書』の一冊として、陳衛平・李春勇『徐光啓評伝』（以下『評伝』と略称）が刊行された。同書は現時点で最も網羅的な徐光啓の評伝であり、また従来の徐光啓に関する歴史的評価の総括ともなっている⁽³⁸⁾。『評伝』では、徐光啓の家系のほか、政治・科学・宗教などの諸領域において彼があげた功績を網羅的に紹介している。さらに徐光啓を彼が生きた明末という時代に位置付け、彼の持つ多面的な人物像を提示し、また、彼の思想の時代を超えた先進性を指摘すると同時に、伝統に縛られた後進性も示し、一層系統的に徐光啓を歴史的人物として評価しているのである。

このように近年では、中国の研究者もイデオロギーの束縛から離れ、歴史人物に対する理解も、より客観的なものになりつつある。陸続と出現する新史料や、それらを利用した新たな文集や年譜の整理・出版とあいまって、今後の徐光啓研究には、一層の発展が期待できるだろう。

二 徐光啓の学術と西洋科学の導入

（一）徐光啓と科学技術

中国における布教方針として、イエズス会は天文学・数学等の西洋科学

知識を中国文人に積極的に紹介していた。徐光啓は、それらの西学から最も深い影響を受けた人物の一人であった。彼は、宣教師から西洋科学の実験方法や思惟方式を受容し、数学・天文学・農業等の分野で中国科学技術の発展に大きく貢献した。徐光啓の科学的な業績と彼の科学思想は、つとに学界の関心を集めたテーマであり、かなり多くの研究成果が残されている。

徐光啓の科学的貢献に関する研究は、彼の科学的な功績を紹介するもののほか、彼の科学的観念を分析するものも多く、そのほとんどが徐光啓の科学実践精神と科学観に高い評価を与えている。例えば、王瑞明⁽³⁹⁾・呉徳鐸⁽⁴⁰⁾及び施宣圓⁽⁴¹⁾の諸氏は、いずれもこうした観点から、徐光啓の科学観を賞揚している。これに対し朱亜宗は、徐光啓の科学的貢献を認めながらも、徐光啓の西洋科学に対する賞揚と中国伝統文化に対する批判を、「全面的な西洋化(全盤西化)」として批判的に論評した⁽⁴²⁾。朱氏の見解は、徐光啓の価値観念における矛盾した心理を指摘したものであるが、この結論はあまりにも性急で、客観性に欠けるように思われる。

また徐光啓を事例として、中国科学の後進性の原因を検討した研究もある。何兆武らは、中国科学の発展が遅れた原因の一つに、明末に伝えられた古い科学思想体系があるとみなし、「もし(それが一筆者)近代科学思想体系であれば、中国の思想文化に新しい局面が開かれただろう」と論じている⁽⁴³⁾。しかしながら、この仮定はそもそも成立し得ない。対外的に見れば、明末の時代背景にあつては、基本的に中国人にとって、西洋宣教師が西洋科学に接触する唯一の機会であった。さらに西洋科学は、宣教師たちにとって結局は伝道のための手段であり、目的ではなかった。したがって、伝道の際に有利な科学思想が優先されるのは当然であり、例えばイエズス会宣教師らがティコ・ブラーエ(Tycho Brahe)の天文学体系、すなわち「地動説」には否定的な立場をとり、「太陽は地球の周りを公転し、その太陽の周りを惑星が公転している」という「修正天動説」を選択したのは、このような歴史的背景に照らして考える必要がある。

徐光啓の科学思想を評価する場合、こうした時代的制約を考慮する必要がある。陳樂民が指摘するように、「近代科学の出現は、ただ技術方面の問題というだけではなく、必ず思想と制度を突破することを前提としなければならない」⁽⁴⁴⁾のである。施威も徐光啓の科学思想と実践から晩明時期の科学思想の形成の背景を考察し、歴史的制約の存在を強調している⁽⁴⁵⁾。

(二) 『農政全書』と徐光啓の農学思想

徐光啓研究において、彼の農書と農学思想は、最も多くの研究が発表されているテーマの一つである。特に『農政全書』はこの分野における重要な研究対象であり、その内容は、主に以下の三つに分類できる。第一は、『農政全書』成書過程とその内容に関する研究であり、胡道静⁽⁴⁶⁾、石声漢⁽⁴⁷⁾、梁家勉⁽⁴⁸⁾の諸氏が、『農政全書』の成書過程や時代背景、内容等について詳細な考察を加えている。日本でも天野元之助が『農政全書』の諸版本を考証するとともに、各巻の内容を紹介している⁽⁴⁹⁾。

第二は、『農政全書』の版本、特にその『別本』の問題に関する研究である。『四庫全書』の農家類に収録される『農政全書』六〇巻のほか、存目には四六巻の「別本『農政全書』」が記載されている。この『別本』の問題は研究者の関心を惹起し、康成懿は『別本』と『農政全書』の内容とが一致する可能性があるという見解を示した⁽⁵⁰⁾。これに対して、胡道静は明崇禎期の『養余月令』巻四に引用される『農政全書』三条が、『農政全書』の内容と異なっているのを根拠として、『別本』が存在するという反論を提示した⁽⁵¹⁾。なお、同年、呉德鐸は『養余月令』に引かれる徐光啓の農学著作が主に『農遺雜疏』であること、『養余月令』が史料としての信頼性が低いことを指摘して、胡氏の見解に反駁している⁽⁵²⁾。しかし、この問題を確定しうる確かな証拠は、いまだ発見されておらず、現時点で『別本』問題について結論を出すことはできないように思われる。なお肖克之は、崇禎十二年の(1639) 初印本の平露堂刊『農政全書』から1979年の上海古籍出版社版にいたるまでの各版本を詳しく整理しているが、『別本』の問題に触れていない⁽⁵³⁾。

第三は、農書の比較研究である。游修齡は、『農政全書』を賈思勰の『齊民要術』、王禎の『農書』、清代官修の『授時通考』と比較して、その特色を明らかにした⁽⁵⁴⁾。韓興勇も『農政全書』と『農政全書』を手本として編纂された宮崎安貞の『農業全書』とを比較・検討している⁽⁵⁵⁾。

『農政全書』以外の徐光啓の農業著作に関する研究もある。特に胡道静は、『甘薯疏』・『農遺雜疏』及び『農書草稿』の輯校本を編纂している⁽⁵⁶⁾。また前述のように、曾雄生は、新たに明崇禎『松江府志』から発見された『農遺雜疏』の一部である「告郷里書」を紹介し、それが徐光啓の「荒政」思想を形成する表象の一つであると論じている⁽⁵⁷⁾。

徐光啓の農業実践と農学思想に関する論考も多い。農業実践については、万国鼎⁽⁵⁸⁾、胡道静⁽⁵⁹⁾の両氏が時代背景もあわせて、徐光啓の農業研究を各階段にまとめ、その農業研究の軌跡を提示している。農学思想に関しては、

呉德鐸が伝統を敢えて破った精神性や実験を重視した態度等の四つの側面から、徐光啓の農学思想の特色を考察している⁽⁶⁰⁾。李長年も、農業政策の側面から徐光啓の農政思想を論じた⁽⁶¹⁾。また劉明も、『農政全書』によって、徐光啓の重農思想と科学実験精神を指摘し⁽⁶²⁾、かつ彼の境遇からその重農思想が形成された背景を分析した⁽⁶³⁾。このほか張麗玲は、徐光啓が「風土論」などで中国の伝統理論と方法を批判あるいは補足する際に、西方科学の実験方法と数学を利用したことに注目している⁽⁶⁴⁾。このほかに近年では、徐光啓の農業思想の一部である「荒政」思想も注目されている⁽⁶⁵⁾。

また徐光啓の農書に記される諸々の具体的な農業技術に関する論考として、天野元之助は『農政全書』における除蝗記事を紹介し⁽⁶⁶⁾、周広西はこれまであまり注目されてこなかった徐光啓の農書における施肥技術について考察している⁽⁶⁷⁾。このほか朱洪涛は朝鮮の農学者である徐有渠の『種薯譜』に引用される『甘薯疏』に基づいて、すでに散逸した『甘薯疏』を輯校・復元し、徐光啓が著した甘薯の栽植技術を紹介した⁽⁶⁸⁾。徐光啓の農学著作と農学思想は多岐に及んでおり、『農政全書』に関しても、養蚕技術や田制等については現時点ではなお十分な検討がなされておらず、今後の研究の進展が期待される。さらに近年の注目すべき研究として、車群と李玉尚の両氏は、歴史地理学の方法を援用して、『農政全書』の記載を他の気象資料と合わせて当時の気候変化の状況から考察し、あわせて気候変動の観点から徐光啓の農業技術を解釈している⁽⁶⁹⁾。

(三) 『幾何原本』と徐光啓の数学思想

明清時代に出版された数多くの漢訳西著の中でも、徐光啓と利瑪竇が共同で翻訳した『幾何原本』は、最も著名なものの一つである。『幾何原本』の出版は、西洋科学の中国への伝播の一つのシンボルであり、中国の数学のみならず、科学全体の発展にも深い影響を与えた。

『幾何原本』に関する研究は、主に四つに分類できる。第一に、その書名に関する問題があり、蘭紀正⁽⁷⁰⁾、白尚恕⁽⁷¹⁾、郝連明⁽⁷²⁾の諸氏が、「幾何」の名称の由来について考証するとともに、徐光啓を代表とする中国文人の『幾何原本』に対する認識についても検討している。

第二に、その伝播と影響についての研究がある。何艾生・梁成瑞⁽⁷³⁾、梅栄照・王渝生・劉鈍⁽⁷⁴⁾、及び尤偉群⁽⁷⁵⁾は、いずれも『幾何原本』の伝播の過程、及び中国科学史における意義とその影響について考察を加えている。また楊沢忠も、『幾何原本』において提示された公理化方法の伝播に着目

し、当時の科学研究環境の制約性について検討している⁽⁷⁶⁾。

第三には、『幾何原本』の翻訳と続訳に関する論考がある。まず翻訳問題については、宋芝業が同書の成書時期を考証し、徐光啓より以前に『幾何原本』の翻訳を試みた人々を紹介し⁽⁷⁷⁾、また王雪源と共に、『幾何原本』が翻訳された原因を中国の伝統数学に論理面が欠如していたことに求め、数学は暦法改革のために導入されたと論じている⁽⁷⁸⁾。『幾何原本』の続訳の問題については、楊沢忠が当時の布教環境の変化、及び利瑪竇逝去の後に徐光啓と交際した宣教師らが『幾何原本』を熟知していなかったことが、同書の翻訳が続けられなかった主な原因であると述べ⁽⁷⁹⁾、さらに利瑪竇にはローマ学院での学習体験があることから、『幾何原本』の翻訳が中止された理由は利瑪竇の能力の欠如によるものではなく、徐光啓が父の喪に服すために上海に戻ったことによると論じている⁽⁸⁰⁾。

第四に、徐光啓の数学思想についての研究も多い。例えば、梅栄照⁽⁸¹⁾、王渝生⁽⁸²⁾、亓方⁽⁸³⁾の諸氏は、徐光啓の様々な数学研究活動及びそれらの研究活動に体现される数学思惟方法等を系統的に論じている。一方で程綱は、徐光啓の幾何学についての認識は伝統的な「見聞の知」とは異なり、王陽明の「良知」観念に近いものであるとみなし、王学思潮の影響を指摘している⁽⁸⁴⁾。なお日本では、寺地遵も『幾何原本』によって徐光啓の数学思想について論じている⁽⁸⁵⁾。

さらに徐光啓の専論ではないが、2007年に出版された安大玉の『明末西洋科学東伝史—『天学初函』器編の研究』は、とくに注目すべき著作である⁽⁸⁶⁾。理編と器編に分けられる『天学初函』は、徐光啓と共に「明末天主教三大柱石」と称された李之藻が編纂した、東西文化交流史についての著作である。理編は、基本的に天主教関連の書物であり、器編は西洋科学の漢訳書籍の収集であり、徐光啓の翻訳と著作も収録している。安氏はこれらの漢訳科学書で紹介された数学理論を詳細に検討するとともに、西洋科学知識を中国に導入する際に仲介者の役割を果たしたイエズス会宣教師の理念、科学に対する彼らの態度、及び中国における西学の受容を分析している。特に数学の分野では、安氏は徐光啓の『幾何原本』や『測量法義』等の翻訳、及び『測量異同』、『句股義』等の数学に関する著作について分析し、その数学理論を具体的に解明して、版本や後世に与えた影響などを論じ、かつ数学の方法論や数理思惟などの受容をより具体的に明らかにしている。

（四）改暦事業と徐光啓の天文暦算思想

明末時期、徐光啓は、パントージャ・ディオーゴ（龐迪我、Deigo de Pantoja）、ウルシス・サバティーノ（熊三拔、Sabatino de Ursis）等の宣教師と協力し、西洋暦法を導入して中国の伝統的な暦に改良を加え、当時としては最も精密な暦法を作成し、また、先進的な西洋の天文暦法観念を中国へ紹介して中国の暦法改革を推進した。

天文暦法に関しては、80年代以前の中国の研究には二つの特徴がある。一つは、天文学の視角からではなく、歴史学の視角から暦法を考察したことである。例えば、徐光啓逝去三〇〇周年にあたる1933年に、潘光旦⁽⁸⁷⁾と李書華⁽⁸⁸⁾は、徐光啓の西洋科学との接触の過程や改暦事業の展開を考察し、彼の学術に対する精神を賞揚した。そのほか、薄樹人も徐光啓の天文学研究の方法と天文学思想を概述している⁽⁸⁹⁾。また改暦活動については、黎正甫⁽⁹⁰⁾・陳久金⁽⁹¹⁾の両氏が、徐光啓らによって提唱された暦法改革の全過程を考察している。陳宏喜も、徐光啓の暦法研究における科学的態度と、「翻訳会通」の思想⁽⁹²⁾、実践と理論の双方を重視する方法の三点に注目して、徐光啓の修暦思想を総括している⁽⁹³⁾。

上述の研究は、総括的に徐光啓の天文研究活動、及び天文暦法思想を論じているが、天文学の理論及び技術についての論及に乏しく、西欧の文化的・科学的背景や科学発展との関連についての検討も十分とはいえない。またこれらの研究は、徐光啓の貢献と新暦の先進性については賞揚するが、一方で、天主教と宣教師に対しては否定的な見解が呈されることが多い。例えば竺可楨は、1933年の南京紫金山天文台における講演において、徐光啓が率先して望遠鏡の製造と使用を提唱したこと、及びイエズス会士が西洋暦法を中国に導入する際の仲介者となったことについては賞揚したが、同時にイエズス会がヨーロッパでガリレオ等の天文学者を迫害したことを指摘し、また「徐光啓はキリスト教徒であったが、彼の偉大な人格は宗門を超えた」と論評している⁽⁹⁴⁾。人民共和国の成立後は、伍学源が徐光啓の暦法上の功績を称揚する一方で、彼の天主教信仰と西洋宣教師に対する観点には批判を加えており⁽⁹⁵⁾、施宣園も徐光啓の「弁学章疏」における宣教師に対する称揚は、「階級と歴史の制約性」から生じたものであると論じている⁽⁹⁶⁾。こうした批判の背景には、いうまでもなく当時の宗教政策や政治状況が関連しているが、天文暦法に関する研究においては、このような状況が他の分野と比べてもより顕著であった。

一方で日本では、藪内清が中国科学に対して西学がもたらした影響を論じる際に、徐光啓による暦法編修をその典型例として論じている⁽⁹⁷⁾。さら

に注目されるのは、橋本敬造の一連の研究である。橋本は、改暦をめぐる崇禎年間に徐光啓により組織された西洋科学の導入体制を検討するとともに⁽⁹⁸⁾、徐光啓が提唱した望遠鏡による観測を例証とする『崇禎曆書』の構成内容は、利瑪竇らが紹介したものとは異なり、「当時のヨーロッパで進行していた科学革命の諸階段における成果を反映したものであった」と評価している⁽⁹⁹⁾。さらに橋本は、英文の著書『徐光啓と崇禎改暦』（“Hsü Kuang-ch’i and Astronomical Reform— The Process of the Chinese Acceptance of Western Astronomy 1629-1635—”）において⁽¹⁰⁰⁾、改暦において徐光啓が主導的役割を果たしていたことを明らかにし、ティコ・ブラーエの宇宙体系を導入する際に利用されたヨーロッパの天文学資料を紹介して、改暦事業の意義に関する考察を深化させた。ついで橋本は、徐光啓が改暦事業において利用した科学体系の形成過程についても検討し、西洋科学の理論・概念と儒家思想及び天主教信仰との関係についても論及している⁽¹⁰¹⁾。

以上の橋本の一連の研究は、当時導入された天文体系と改暦の際に用いられた儀器・技術と徐光啓の天文思想とを関連させて系統的に検討し、技術的側面と思想的側面の双方から改暦の全貌を明らかにしたものであった。このような科学技術と歴史とを関連させた研究は、中国の科学史研究ではなお不十分であり、徐光啓研究に重要な意義を持つ成果といえるだろう。

（五） 西洋式火器導入と徐光啓の軍事思想

明末の動乱期を生きた徐光啓は、軍事面でもさまざまな業績を残している。『徐氏庖言』や奏疏等の史料には、軍事的な戦略・戦術や武器等について、多くの見解が提示されており、彼の軍事思想を窺うことができる。例えば、施宣園⁽¹⁰²⁾、陸文栄⁽¹⁰³⁾、盧鏐⁽¹⁰⁴⁾の諸氏は、徐光啓による軍隊の訓練や武器の製造について考察し、戦術・戦略や軍隊配備等の問題にも論及している。また『徐氏庖言』のほかに、1980年代末に発見された『兵機要決』も徐光啓の軍事思想に関する重要な史料である。王慶余は、『兵機要決』の内容をいち早く紹介し、徐光啓の軍事思想をより深く解明している⁽¹⁰⁵⁾。

さらに日本でも、久芳崇が明末期の東アジアにおける火器伝播に関する専著において、徐光啓による西洋式火器の導入について包括的に論じている。久芳は徐光啓をはじめとする中央・地方官僚を中心に、澳門から最新

鋭の西洋式火器が大量に購入され、火器装備の刷新が図られたことを示すとともに、朝廷内での抵抗などによってその成果には限界があったと論じている⁽¹⁰⁶⁾。また中国でも、劉鴻亮が西洋式大砲の普及に徐光啓の尽力があったことを指摘し⁽¹⁰⁷⁾、初曉波も西洋火器との接触による徐光啓の戦争観念の変化と、それに付随して生じた一連の新たな進攻・防御思想を考察した⁽¹⁰⁸⁾。

さらに董少新・黄一農は、大量のポルトガル文献と漢文文献を併用して、ポルトガル士兵の募集及び大砲の購入とその影響について詳しく考察し、募集された銃師部隊の成員構成や徐光啓の軍事改革、後金との対戦過程を明らかにしている⁽¹⁰⁹⁾。これに対し、桐藤薫は、徐光啓による西洋式大砲の購入などの「強兵政策」は、南京教難の後の宣教師と伝教事業を守ることを意図していたが、これは逆に宣教師らと国土侵略の危険性とを関連付けることとなり、伝教にマイナスの影響を与える結果となったと論じている⁽¹¹⁰⁾。

以上、五項目にわたって紹介したように、徐光啓の科学面での功績については、近年ではより全面的な研究が進みつつある。従来の研究の関心は、主にその科学思想の整理や、『農政全書』・『幾何原本』等の主要著作の分析に集中していたが、近年では、『農遺雜疏』など他の科学著作に関する研究も徐々に増加している。また具体的な科学技術と科学理論に着目した研究も多くなり、数学・天文学・歴史地理学などの観点からの論考も発表され、栽植技術や肥料技術など、従来ほとんど手つかずであった分野の研究も行われ始めた。史料面では、漢文史料だけではなく、欧文史料を積極的に利用した研究も現れており、同時代の社会背景や歴史的制約にも注意が払われるようになっていく。今後の中国科学史研究においても、徐光啓を中心とした明末期の科学技術研究は、新たな視点から多面的な議論の進展が期待できる分野といえるだろう。

三 徐光啓の天主教信仰と中西会通

(一) 徐光啓の天主教信仰をめぐる諸問題

1980年代以前、中国における徐光啓の宗教思想に関する研究は、基本的に教会関係者によって行われていた。当時、徐宗沢神父によって創立された『聖教雑誌』(1912-1938)は、徐光啓の宗教についての研究の主要な掲載雑誌であった。そこにはもっぱら徐光啓を天主教信徒の模範として褒め称える論文や、徐光啓の宗教生活についての逸聞などが掲載されていた。

教会関係者による研究は、もっぱら徐光啓を信仰の模範として強調する傾向があったが、これに対し教会外部の研究者のなかには、徐光啓の信仰、特に天主教を受容した動機については疑義を呈する者も少なくなかった。

戦後中国での徐光啓研究は、科学者としての徐光啓に集中しており、政治的状况によって、彼の宗教信仰に関する議論は、意図的に避けられる傾向があった。また海外においても、著名なフランスの中国学者であるジャック ジェルネ（Jacques Gernet）が、明末中国では社会文化的背景が西欧とまったく異なっているため、本格的にキリスト教を受容することは困難であったという見解を示している⁽¹¹¹⁾。日本でも佐伯好郎が、「徐光啓の根本思想は中華思想であって、彼は完全には天主教民とはなり得なかった」と述べ⁽¹¹²⁾、中村高志も徐光啓の天主教信仰は儒教の枠を越えないものであったと見なしている⁽¹¹³⁾。

ただし1980年代になると、中国においても徐光啓の宗教信仰に関する見解には変化がみられる。まず呉徳鐸は1983年の論文において、『徐光啓集』の主編である王重民の説に反論し、徐光啓の天主教信徒としての立場を認め、「補儒易仏」（儒を補い仏を易う）の思想によって西学を導入した徐光啓の態度とその目的を分析した⁽¹¹⁴⁾。この論文は多くの研究者の注意を集め、これ以降、徐光啓の宗教思想と信仰に注目した研究もしだいに増加していった。

1980年代後半以降、徐光啓の宗教信仰についての研究は、主に次のような論点を中心に進められている。まず「補儒易仏」に代表される徐光啓の宗教神学思想や、天主教に対する彼の理解と認識に注目する論考がある。例えば李天綱は、徐光啓の天主教擁護のための著述や、科学・政治関係の著作から、それらに含まれるキリスト教神学に対する徐光啓の理解を検討し、徐光啓の思想の転化と中西文化合流の時代的背景との関連を分析した⁽¹¹⁵⁾。李天綱はまた、徐光啓を一人の天主教徒とする立場から、彼の天主教と仏教とに対するそれぞれ異なった態度と観念を比較し、また「補儒易仏」観念を提示した思想的背景と時代的背景についても考察している⁽¹¹⁶⁾。さらに湯一介・孫尚楊は、徐光啓の儒教から天主教への転向過程における、中国伝統文化に対する反省と批判、及び当時「天学」と呼ばれた天主教神学に対する態度を考察しており⁽¹¹⁷⁾、晏可佳も徐光啓の入教動機や「補儒易仏」思想を分析し、南京教難と暦法編修に現れる徐光啓の伝教・護教への貢献を論じている⁽¹¹⁸⁾。

ついで徐光啓の天主教受容の思想的淵源や、それに対する明末の思想環境の影響も関心を集めている。例えば孫尚楊は、徐光啓を代表とする明末

文人信徒は、当時の文化的背景の下でどのように西学と天主教を理解し、受け入れたのを考察し、徐光啓が早くに学んだ陽明心学思想や、進士合格後の明末玄虚の学風に対する排斥、及び「博く天人を究めて、実用を主とす(博究天人、主実用)」といった態度が、徐光啓の天主教を受け入れる際の出発点となったと論じた⁽¹¹⁹⁾。日本でも安部力が、徐光啓の思想形成の過程を考察し、そこで徐光啓が早期に接触した諸思想を分析し、徐光啓と天主教の出会いや、彼の天主教認識について論述している⁽¹²⁰⁾。陳衛平・李春勇『徐光啓評伝』においても、明末の心学と実学の思潮が徐光啓の天主教受容に与えた影響が指摘されている⁽¹²¹⁾。さらに馬曉英も、かつて王学の門人であった徐光啓が「空談心性」(心性を理論ばかりのものとする事)という王学の流弊を批判していることから、徐光啓と王学、また西学受容との関係を検討し、徐光啓を典型として明末文人の複雑な文化的性格に分析を加えた⁽¹²²⁾。

このほかに徐光啓の宗教思想的経験については、何善蒙が一つの興味深い見解を提示している⁽¹²³⁾。何善蒙は明清交代期に福建地区で盛んになった林兆恩の創立になる「儒」・「釈」・「道」三教の融合をとなえる「三一教」という宗教組織を紹介し、三一教に残された徐光啓に関する記録や、彼と三一教門人との交際、及び徐光啓の思想変化等から、天主教信仰を受け入れる前の徐光啓は、三一教に入信していた可能性があることを指摘した。史料の限界から、徐光啓が三一教門人であったかどうかを確定することはできないが、この見解は、徐光啓理解に一つの新たな観点を提供するものといえよう。

徐光啓の宗教信仰と科学研究、あるいは「西教」と「西学」との関連も、注目を集めつつある。前述のように、従来の研究では、徐光啓は西洋科学を導入するために天主教信仰を受容したと論じられることもあり、彼のキリスト教信仰に対する西学の影響も強調されることが多かった。これに対し尚従智は、逆に天主教神学が徐光啓の科学実践に影響を与えたとする見解を提示した⁽¹²⁴⁾。それによれば徐光啓は明確に中世的な天主教の神学理論を通じて演繹法を認識し、さらに科学実験にこの演繹法を用いることによって天主教信仰を強化したとされる。

上述の研究は、主に徐光啓個人の宗教思想についてのものであるが、今世紀にはいると徐光啓をめぐる社会関係や、彼と交際していた文人集団等も考察の対象となり、徐光啓の宗教信仰の研究に新たな視角を提供する研究も現れはじめた。例えば張化は、明末清初における地方社会と天主教会の関係をめぐる事例研究として、徐光啓および徐氏一族と、上海天主教会

の発展との関係を簡潔に論じている⁽¹²⁵⁾。また李天綱も、徐光啓と明末江南で大きな影響力を有していた復社のメンバーとの交際に検討を加えた⁽¹²⁶⁾。またティモシー・ブルック (Timothy Brook) は、徐光啓と董其昌が類似した社会的背景と生活体験を持っていたにもかかわらず、相互に異なる宗教信仰を選んだことに注目し、彼らを両種の典型例として、明末の文人の文化的な心理を考察している⁽¹²⁷⁾。

さらに馬学強は、進士合格以前の徐光啓と同郷の文人たちとの交際を検討し、徐光啓の実学思想が上海やその周辺地域の文人たちに与えた影響について論じており、また徐氏一族を中心として形成された伝道ネットワークについても簡明に紹介している⁽¹²⁸⁾。また劉耘華も、徐光啓家族の姻族である孫氏の子孫である孫致弥と、同じく許氏の子孫である許纘曾を中心に、彼らの文学作品の考察を通じて二人の信仰世界と思想の変化に検討を加えた⁽¹²⁹⁾。これらの研究は、徐光啓の周囲の社会文化的な環境を復元し、徐光啓が地域社会において与えた文化認識面での影響を分析したものとして注目される。

教会側の徐光啓についての研究も絶えずなされてきた。特に、上海開教周四〇〇年記念（2008年）の際、教会も様々な研究活動を行った。この際、最初に天主教を上海へ紹介した人物の一人である徐光啓もテーマの一つとなった。これらの研究では、上海開教と教会の発展史をめぐって、様々な面から検討が加えられた⁽¹³⁰⁾。その中で注意すべきは、徐光啓に因んで名付けられた徐家匯地区についての研究である。徐家匯地区は、明清時代から今にいたるまで上海ひいては中国における最も盛んな天主教の中心地の一つであり、天主教に関する建築や遺跡も多く残されている。徐家匯の発展は徐光啓の努力とその影響と切っても切れないつながりを有しており、徐光啓の宗教信仰を考察する際の視角の一つとなっている。教会によってなされた徐家匯に関する研究は、学術性が不足しているものもあるが、テーマとしては徐光啓研究に一つの示唆を与えるものである。

現在に至るまでの一世紀近い期間に、徐光啓の天主教信仰に対しては、疑義を呈するものから、積極的に評価するものへと、研究の主流が変化してきている。特に、この三〇年間は、徐光啓の宗教信仰について多くの研究がなされ、徐光啓の信徒としての立場を解明し、彼の宗教思想や思想文化の背景などについて、詳しく研究がなされてきた。従来ほとんどの研究は、明末社会の文化背景が徐光啓の宗教信仰に与えた影響を重視しているが、最近では、逆に徐光啓が明末社会に与えた影響に注目する研究も徐々に増えてきている。これらの研究は、徐光啓だけではなく、彼の周りの人

々や社会集団までも考察対象とし、マクロな視点から徐光啓の宗教信仰を検討したものである。今後、徐光啓の地域への影響、集団及び個人との交際、並びに家族関係等について系統的な考察を行えば、徐光啓の信仰、ひいては天主教の伝播をより深く理解することができるだろう。

(二) 中西会通について

明末清初期の中西文化交流史研究のなかでも、徐光啓が提唱した「翻訳」・「会通」・「超勝」という文化精神は多くの研究者の注目を集め、中西文化の融合と衝突の代表例として論じられてきた。

方豪の中西交流史研究に関する古典的研究でも、徐光啓の名はしばしば言及されているが、その叙述はそれほど詳しいものではない⁽¹³¹⁾。これに対し何兆武は、徐光啓の科学的貢献と科学哲学思想を、時代的背景と社会的環境の影響もあわせて論じ、徐氏の科学理論における先進的な部分と、伝統に束縛されていた部分とに分析を加えた⁽¹³²⁾。また沈定平も、徐光啓の「補儒易仏」の観念から儒教と天主教の融合を論じている⁽¹³³⁾。このほかにも、徐光啓を代表例として明末清初の中西交流を検討した論考は多い。例えば羅冬陽は、中国知識人による西学受容にともなう文化的問題に着目して、明末清初の西学の特徴を考察し、特に徐光啓を代表とする中国の科学者が、西洋科学から受けた影響について論究した⁽¹³⁴⁾。また余樂三も、徐光啓を代表とする明末の進歩的学者の実践と、彼らに対する西学の影響を検討している⁽¹³⁵⁾。

近年では西学の思惟方法の影響も、注目を集めつつある。蘇志宏は中国哲学の天道観、認識論と方法論に西学が与えた影響を分析し、徐光啓を例として実証主義的特色がある西学の思惟方法と方法論が、「実学」を提唱した中国儒士らに与えた影響を解明した⁽¹³⁶⁾。また馮天瑜は、『幾何原本』を例として、明末清初に伝来した西学が中国文化にもたらした新しい思惟方法を指摘している⁽¹³⁷⁾。さらに尚志従は、徐光啓と利瑪竇によって中国の伝統的な「格物致知」思想と、西方科学の演繹推理の方法が結合され、「格物窮理」の原則のなかに中西学者の認識論の融合が見られると論じている⁽¹³⁸⁾。

また文化観念の視点から、儒家思想と天主教との会通に注目した論考もある。例えば龔道運は、利瑪竇により提示された「補儒易仏」思想が中国に与えた影響を論じるとともに、儒学の伝統を受け継ぐ徐光啓と李之藻が、

科学を重視して天主教徒ともなり、それによって間接的に儒学と天主教との会通を実現したと論じた⁽¹³⁹⁾。また李天綱は、「中学西源」・「西学中源」という二つの偏った見方を批判し、徐光啓らの提唱した「会通」の概念を紹介して、天主教と儒教の文化的な異同を比較したうえで、両者の融合について考察を加えている⁽¹⁴⁰⁾。このほか、異なる知識人集団の文化的心理に着目した論考として、鄭建華は徐光啓を代表とする西学を認めた集団と、楊光先を代表とする西学を排斥した集団の文化的な心理とを対比している⁽¹⁴¹⁾。

今後の展望 — 結びにかえて

徐光啓が四〇〇年間にわたって多く学者の注目を集めてきたのは、彼がきわめて博学多才な、明末を代表する知識人であるとともに、その学術・信仰が多面的であり、彼の生きた明末社会の特殊性を反映しているためであろう。このため徐光啓を研究する際には、彼自身の業績を解明するだけでなく、同時代の政治的・文化的背景の特質までも含めて、総体的に検討を行うことが求められる。

中国では徐光啓の科学面での功績には早くから大きな関心が寄せられていたが、彼の宗教信仰に関する研究が本格化したのは比較的最近のことである。これに対し、欧米の研究では徐光啓の科学面での活動以上に、宗教信仰や社会文化心理などが重視されている。徐光啓と天主教との邂逅は、彼が西洋科学と接触する際の重大な契機であり、また思想観念や文化的な心理の重要な転換点でもある。徐光啓の宗教信仰に関する諸研究では、彼の宗教思想の内容とその形成の背景、及び入信の動機等が論じられてきたが、近年ではさらに彼をめぐる社会環境や、家族や友人との関係等についても考察の対象が広がりつつあり、研究方法や視角も多様化している。

さらに筆者は、宗教心理学的なアプローチも注目に値すると考えている。非信徒にとって、信徒の行動や考え方は往々にして理解し難く、そこに誤解を生じやすい。宗教心理を分析することによって、宗教活動における信徒個人の、あるいはグループの信仰に関わる行為や活動に対して理解が深まり、宗教の影響力と制約性を理解する際の一助になる。現時点では、中国・日本では宗教心理学の理論を応用して宗教思想を分析した研究はそれほど多くないようである⁽¹⁴²⁾。徐光啓研究の場合では、歴史学の研究方法を用いるとともに、社会学や宗教心理学などの理論も応用して、社会文化構造と結び付け、徐光啓、あるいは徐光啓を代表とする士人信徒グループ

の宗教心理と宗教意識を分析すれば、彼らの宗教感情や社会生活において宗教が果たした役割や信仰の伝播をより深く理解することができると思われる。また、徐光啓らの交遊や家族などの人的ネットワークの考察を通じて、彼らの地域での社会影響力も明らかにすることも可能であり、こうした研究手法によって、徐光啓思想に対する理解もさらに総体的なものとなることができるだろう。

註

- (1) 『四庫全書』に収録された徐光啓の作品は、『測量異同』『測量法義』『句股義』『新法算書』（すなわち『西洋曆法新書』）『農政全書』『幾何原本』である。
- (2) 朱維鈺・李天綱編『徐光啓全集』第三冊（上海古籍出版社、2010年）一四二頁。禁毀された『徐氏庖言』は中国では一度失われ、1933年までにフランス国家図書館所蔵の明刻本によって、ふたたび影印出版されている。
- (3) 李杕編『徐文定公集』（上海慈母堂、1896年）。
- (4) 徐允希編『徐文定公墨跡』（鴻寶齋石印本、1903年）。
- (5) 徐允希編『増訂徐文定公集』（上海慈母堂、1909年）。
- (6) 徐宗沢編『増訂徐文定公集』（徐家匯天主堂藏書樓、1933年）。
- (7) 上海市文物保管委員会編『徐光啓手跡』（中華書局、1962年）。ただし発行部数は五〇〇部にすぎなかった。
- (8) 王重民編『徐光啓集』（中華書局、1963年）。
- (9) 上海市文物保管委員会編『徐光啓著訳集』（上海古籍出版社、1983年）。
- (10) 朱維鈺・李天綱編『徐光啓全集』（上海古籍出版社、2010年）第一冊「編纂説明」三頁。
- (11) 榎一雄「徐光啓逝世三百五十年」（『東方学』第六八輯、1984年）。
- (12) 李天綱編『明末天主教三柱石文箋注——徐光啓・李之藻・楊廷筠論教文集』（道風出版社、2007年）一〇五頁。
- (13) 曾雄生「『告郷里書』：一則新發現の徐光啓遺文及其解読」（『自然科学史研究』2010年第一期）。
- (14) 1962年の徐光啓四〇〇周年生誕記念活動において、徐氏の子孫は『徐氏宗譜』八冊を中国政府に寄贈した。この『徐氏宗譜』は上海博物館に収蔵されている。
- (15) 于浩輯『明代名人年譜』（中国国家図書館出版社、2006年）。
- (16) 徐景賢『明賢徐文定公年譜初編』（『学風』第四卷第五・六期、1934年）。
- (17) 梁家勉編『徐光啓年譜』（上海古籍出版社、1981年）「前言」。
- (18) 王治心『徐光啓年譜』（『天籟』第二五卷第二期、1936年）。吳季桓『徐光啓』（梁実秋主編『名人偉人伝記全集』第三六冊、名人出版、1982年）。王重民著・何兆武校訂『徐光啓』（上海人民出版社、1981年）「付録」。
- (19) 梁家勉編『徐光啓年譜』（上海古籍出版社、1981年）。
- (20) 前掲註(10)『徐光啓全集』第一〇冊。
- (21) オーギュスト・コロンベル『江南伝教史』（天主教上海教区光啓社、2008年）。

本書はかつて上海土山湾印書館からフランス語の石印本として出版されている（ただし、公開発行はされていない）。全部で三編であり、前二編は上海人の周士良により翻訳され、上海教区図書館資料室に保存されていた。2008年9月までに天主教上海教区光啓社によって第一冊が出版された。

- (22) なお梁家勉編の『年譜』では、『江南伝教史』付録の『許母徐太夫人事略』のみ利用している。『許母徐太夫人事略』は宣教師拍応理が書いた徐光啓の孫娘許甘第大の伝記である。当時、高龍盤『江南伝教史』の漢訳本はまだ正式に出版されていなかったため、梁氏が参照したのは恐らく上海教区図書館資料室に保存されている翻訳原稿であろう。
- (23) 前掲註(8)王重民編『徐光啓集』「付録」に収録。
- (24) フィリップ・クブレ『徐光啓行略』（『聖教雑誌』第二三卷第六期、1934年）。原文は『法国国家図書館明清天主教文献』に収録されている。
- (25) 梁啓超『清代學術概論』（上海古籍出版社、2005年）、胡適『中国的文芸復興』（外語教学与研究出版社、2001年）。
- (26) 李杓「徐文定公行実」（『国風』第四卷第一期、1934年）。
- (27) 徐宗沢『文定公徐上海伝略』（徐家匯土山湾印書館、1934年）。本書は、徐光啓逝去三〇〇周年記念の際に徐家匯土山湾印書館により出版された特別刊行である。『梵蒂岡図書館所蔵漢籍目録』（中華書局、2006年）を参照。
- (28) 方豪「徐光啓」（『中国歴代明賢故事集』勝利出版社、1944年）。
- (29) 方豪「徐光啓伝」（『中国天主教史人物伝』中華書局、1988年）。
- (30) 羅光『徐光啓伝』（香港公教真理学会、1953年）。
- (31) 黄節「徐光啓伝」（『国粹学報』第一卷第一〇期、1906年）。
- (32) 二〇世紀における徐光啓研究の回顧については、呉德鐸「我国研究、評価徐光啓概述」（『社会科学』、1982年第一〇期）を参照。
- (33) 竺可楨「近代科学先駆徐光啓」（『聖教雑誌』第二三卷第六期、1934年）。
- (34) 後藤基巳「徐光啓」（初出1963年、のち『明清思想とキリスト教』研文出版社、1979年に収録）、同「保祿徐公評伝（一）」（初出1963年、同書に収録）、同「保祿徐公評伝（二）」（初出1973年、同書に収録）。
- (35) 朱伝誉主編『徐光啓伝記資料（一）（二）』（天一出版社、1979年・1981年）。
- (36) 前掲註(18)呉季桓『徐光啓』。
- (37) 華南農学院農業歴史遺産研究室編『徐光啓生平及其學術資料選編』（華南農学院農業歴史遺産研究室出版、1983年）。
- (38) 陳衛平・李春勇『徐光啓評伝』（南京大学出版社、2006年）。
- (39) 王瑞明「我国傑出的近代科学先駆徐光啓」（『華中師院学報』1979年第三期）。
- (40) 呉德鐸「畢生献身科学的徐光啓」（『自然雑誌』1982年第三期）。
- (41) 施宣円「徐光啓的科学思想」（『史学月刊』1983年第五期）。
- (42) 朱亜宗「科学的創造者と文化的迷途者—徐光啓歴史角色新探」（『自然辯証法通訊』1990年第二期）。
- (43) 何兆武「明清之際中国人的科学観—以徐光啓為例」（『北京行政学院学報』2004年第四期）。
- (44) 陳樂民「徐光啓の命運和啓示」（『歴史教学問題』2004年第一期）。
- (45) 施威「晚明科学思想及其歴史意義——以徐光啓為例」（『科学技術と弁証

- 法』2006年第五期)。
- (46) 胡道靜「徐光啓農學著述考」(『圖書館』1962年第三期)、同「徐光啓的農學著作問題」(『中華文史論叢』第三輯、1963年)。
 - (47) 石声漢「徐光啓和農政全書」(中国科学院自然科学研究室編『徐光啓記念論文集』中華書局、1963年)。
 - (48) 梁家勉「農政全書撰述過程及若有關問題的探討」(前掲註(47)『徐光啓記念論文集』)。
 - (49) 天野元之助「明徐光啓『農政全書』について」(『農業総合研究』第一八卷第一号、1964年)。
 - (50) 康成懿『農政全書徵引文献探原』(農業出版社、1960年)。
 - (51) 胡道靜「關於『農政全書』的「別本」」(『中国農史』1983年第一期)。
 - (52) 吳德鐸「關於『養余月令』与『農政全書』的「別本」」(『中国農史』1983年第三期)。
 - (53) 肖克之「『農政全書』版本說」(『古今農業』2001年第一期)。
 - (54) 游修齡「從大型農書体系的比較試論『農政全書』的特色和成就」(『中国農史』1983年第三期)。
 - (55) 韓興勇「『農政全書』在近世日本的影響和傳播——中日農書的比較研究」(『農業考古學』、2003年)。
 - (56) 胡道靜「徐光啓農學三書題記」(『中国農史』1983年第三期)。
 - (57) 現存する『農遺雜疏』には、「告郷里書」が収録されていない。
 - (58) 万国鼎「徐光啓の學術路線和对農業的貢獻」(前掲註(47)『徐光啓記念論文集』)。
 - (59) 胡道靜「徐光啓研究農學歷程的探索」(『歷史研究』1980年第六期)。
 - (60) 吳德鐸「試論徐光啓農業科學思想之特色——記念徐光啓逝世三五〇周年」(『農業考古』1983年第二期)。
 - (61) 李長年「徐光啓的農政思想——記念徐光啓逝世三百五十周年」(『中国農史』1983年第三期)。
 - (62) 劉明「論徐光啓的重農思想及其實踐——兼論『農政全書』的科學地位」(『蘇州大學學報』2005年第一期)。
 - (63) 劉明「徐光啓農本思想成因探微」(『江南大學學報』2006年第五期)。
 - (64) 張麗玲「論西方科學技術对徐光啓農學思想的影響」(『農業考古』2011年第一期)。
 - (65) 李志堅「試論徐光啓的荒政思想」(『農業考古』2004年第一期)、鄭二紅「試析徐光啓的荒政思想及其現實意義」(『農業考古』2010年第四期)、李志堅「徐光啓的農業備荒思想」(『農業考古』2011年第四期)。
 - (66) 天野元之助「徐光啓の『農政全書』と除蝗考」(『松山商大論集』第一卷第四号、1950年)。
 - (67) 周廣西「論徐光啓在肥料科技方面的貢獻」(『中国農史』2005年第四期)。
 - (68) 朱洪濤「徐玄扈『甘薯疏』輯校」(『中国農史』1983年第三期)。
 - (69) 車群・李玉尚「『農政全書』所反映的一六〇〇年前後氣候突變」(『中国農史』2011年第一期)。
 - (70) 蘭紀正「对『幾何原本』中幾個問題的探討」(『陝西師範大學學報』1991年第

- 三期)。
- (71) 白尚恕「再論『幾何原本』之名称」(『北京師範大学学报』1993年第二期)。
- (72) 郝連明「徐光啓与『幾何原本』」(『吉林教育』2010年第十九期)。
- (73) 何艾生・梁成瑞「『幾何原本』及其在中国的傳播」(『中国科技史雜誌』1984年第三期)。
- (74) 梅荣照・王渝生・劉鈍「欧幾里得『原本』の伝入和对我国明清数学發展の影響」(席沢宗・呉徳鐸主編『徐光啓研究論文集』学林出版社、1986年)。
- (75) 尤偉群「『幾何原本』在中国的傳播及其意義」(『歴史教学』1989年第一期)。
- (76) 楊沢忠「明末清初公理化方法未能在我国広泛傳播的原因」(『科学技術哲学研究』2006年第五期)。
- (77) 宋芝業「徐・利訳『幾何原本』若干史実新証」(『山東社会科学』2010年第四期)。このほか、『幾何原本』の版本について、方行は、「關於『幾何原本』三校本的探討」(前掲註(74)『徐光啓研究論文集』)において、徐光啓によって三度校訂され、徐光啓逝去の後、孫の徐爾默が整理、出版した『幾何原本』のいくつかの問題について論じている。
- (78) 宋芝業・王雪源「為什麼翻訳『幾何原本』——『幾何原本』(前六卷)翻訳過程中的中西比較」(『北京理工大学学报』2010年第五期)。
- (79) 楊沢忠「徐光啓為什麼不統訳『幾何原本』後九卷」(『歴史教学』2005年第一〇期)。
- (80) 楊沢忠「利瑪竇中止翻訳『幾何原本』再析」(『歴史教学問題』2006年第二期)。
- (81) 梅荣照「徐光啓的数学工作」(前掲註(47)『徐光啓記念論文集』)。
- (82) 梅荣照・王渝生「徐光啓的数学思想」(前掲註(74)『徐光啓研究論文集』)。
- (83) 元方「徐光啓数学觀淺析」(前掲註(74)『徐光啓研究論文集』)。
- (84) 程綱「王学思潮对徐光啓幾何学義理思想的影响」(『湖南大学学报』2006年第三期)。
- (85) 寺地遵「徐光啓の自然研究に関する覚書—除蝗論と幾何学をめづって」(古田敬一教授頌寿記念論文集編集委員彙編『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』汲古書院、1997年)。
- (86) 安大玉『明末西洋科学東伝史—『天学初函』器編の研究』(知泉書館、2007年)。
- (87) 潘光旦「徐光啓与天文曆算科学——徐文定公三百年祭後」(『聖教雜誌』第二三卷第六期)。
- (88) 李書華「徐光啓逝世三百年紀念日感言」(『聖教雜誌』第二三卷第六期)。
- (89) 薄樹人「徐光啓的天文工作」(前掲註(47)『徐光啓記念論文集』)。
- (90) 黎正甫「明季修改曆法始末」(『大陸雜誌』第一二卷第一〇—二期、1963年)。
- (91) 陳久金「徐光啓和『崇禎曆書』」(前掲註(74)『徐光啓研究論文集』)。
- (92) 徐光啓により提示された「欲求超勝、必須会通。会通之前、先須翻訳」、すなわち西学を超えるためには、まず中国の学問と西学を総合的にすみずみまで理解しなければならない。そしてその前に、まず翻訳を行うべきだという思想。
- (93) 陳宏喜「試論徐光啓修曆思想之特点」(『西安交通大学学报』1999年第三期)。
- (94) 竺可楨「紀念明末先哲徐文定公——在南京紫金山天文台講話」(『宇宙』1933

- 年第八期)。
- (95) 伍学源「徐光啓在農学和曆法方面的成就」(『北京師範大学学報』1975年第二期)。當時はちょうど中国文化大革命の「批林批孔」運動のさ中であり、反宗教的態度がとりわけ強い。
- (96) 施宜園「博取衆長集思広益——徐光啓修訂『大統曆』の経験」(『社会科学』1982年第三期)。
- (97) 藪内清「明清時代の科学技術史」(『明清時代の科学技術史』朋友書店、1997年)。
- (98) 橋本敬造「『崇禎曆書』の成立と「科学革命」」(『関西大学社会学部紀要』第一二卷第二号、1981年)。
- (99) 橋本敬造「明末の中国に伝えられた「科学革命」の成果」(『関西大学社会学部紀要』第一三卷第一号、1981年)。
- (100) 橋本敬造『徐光啓と崇禎改曆』(関西大学出版部、1988年)。
- (101) 橋本敬造「徐光啓にみる改曆事業と儒教の理論」(『関西大学社会学部紀要』第三四卷第三号、2003年)。
- (102) 施宜園「徐光啓軍事活動」(『社会科学』1983年第一一期)。
- (103) 陸文栄「徐光啓軍事思想初探」(『軍事歴史』1984年第四期)。
- (104) 盧鏐「徐光啓軍事改革思想」(『軍事歴史』1987年第六期)。
- (105) 王慶余「新発見的徐光啓『兵機要決』」(『復旦大学学報』1983年第六期)。
- (106) 久芳崇『東アジアの兵器革命』(吉川弘文館、2010年)。
- (107) 劉鴻亮「明清時期紅夷大砲の興衰与両朝西洋火器發展比較」(『社会科学』2005年第一二期)。
- (108) 初曉波「西洋火器引入与徐光啓对外新觀念」(『徐州師範大学学報』2009年第四期)。
- (109) 董少新・黄一農「崇禎年間招募葡兵新考」(『歴史研究』2009年第五期)。
- (110) 桐藤薫著、王明偉訳「明末耶蘇会伝教士与仏郎机——伝教士は侵略者觀念的形成」(『史学集刊』2011年第三期)。
- (111) ジャック ジェルネ『中国和基督教—中国和欧洲文化之比較』(上海古籍出版社、1993年) 三五六頁。
- (112) 佐伯好郎「明時代の支那基督教」(『支那基督教の研究三』春秋社松柏館、1944年) 三八五頁。
- (113) 中村高志「徐光啓の天主教観に関する一考察」(『中国哲学』第一一号、1982年)。
- (114) 呉德鐸「試論徐光啓の宗教信仰与西学引進者的理想」(前掲註(74)『徐光啓研究論文集』)。
- (115) 李天綱「徐光啓与明代天主教」(『史林』1988年第二期)。
- (116) 李天綱「< 補儒易佛 > : 徐光啓的比較宗教観」(『上海社会科学院学術季刊』1990年第三期)。
- (117) 湯一介・孫尚楊「徐光啓為什麼是天主教徒」(『中国文化』1990年第二期)。
- (118) 晏可佳「徐光啓の宗教情懷」(『中西文化会通第一人—徐光啓學術研討會論文集』上海古籍出版社、2006年)。
- (119) 孫尚楊『基督教与明末儒学』(東方出版社、1994年)。

- (120) 安部力「徐光啓の天主教理解について」(『中国哲学論集』第二五号、1999年)。
- (121) 前掲註(38)陳衛平・李春勇『徐光啓評伝』。
- (122) 馬曉英「徐光啓と王学之關係考察」(『哲學動態』2009年第二期)。
- (123) 何善蒙「徐光啓と三一教—対徐光啓早年経歴及思想演变的一種可能性的考察」(『漢語神学与公共空間』『基督教文化評論』第三二期、2010年)。なお前掲註(119)安部力「徐光啓の天主教理解について」でも徐光啓が三一教から受けた影響について触れている。
- (124) 尚從智「宗教対科学思想的促動——關於徐光啓倡議演繹推理的分析」(『自然弁証法通訊』2006年第六期)。
- (125) 張化「試論上海地方政府和教会的關係」(『世界宗教研究』1998年第二期)。
- (126) 李天綱「早期天主教与明清多元社会文化」(『史林』1999年第四期)。
- (127) ティモシー・ブルック「儒家士大夫の宗教—董其昌の仏教与徐光啓の基督教」(『中国學術』2004年第一期)。
- (128) 馬学強「徐光啓与明末上海社会」(註(117)『中西文化会通第一人—徐光啓學術研討会論文集』)。
- (129) 劉耘華「徐光啓姻親脈絡中的上海天主教文人、以孫元化・許樂善二家族为中心」(『世界宗教研究』2009年第一期)。
- (130) 「天主教上海開教四百周年研討会」に発表された論文のうち数篇は『天主教研究資料匯編』第一〇四輯(天主教上海教区光啓社、2009年)に収録されている。
- (131) 方豪『中西交通史』(岳麓書社、1983年)。
- (132) 何兆武『中西文化交流史論』湖北人民出版社、2007年。
- (133) 沈定平『明清之際中西文化交流史——明代：調適与会通』(商務印書館、2007年)。
- (134) 羅冬陽「論明末清初西学的分期与特徵」(『東北師大学報』2002年第四期)。
- (135) 余樂三「向西方尋找真理的先驅——論晚明的開明学者」(『新視野』2007年第二期)。
- (136) 蘇志宏「論中国哲学的前近代啓蒙」(『文史哲』2002年第一期)。
- (137) 馮天瑜「明清之際西学与中国學術近代轉型」(『江漢論壇』2003年第三期)。
- (138) 尚志從「明末中西認識論觀念的会通」(『自然弁証法通訊』2003年第六期)。
- (139) 龔道運「儒学和天主教在明清的接触和会通」(『世界宗教研究』1996年第一期)。
- (140) 李天綱「天儒同異—明末清初中西文化学説述評」(『復旦學報』1997年第三期)。
- (141) 鄭建華「文化轉型初期中国士人对西学的價值取向」(『江漢論壇』1996年第八期)。
- (142) 欧米の学界では、これらの理論を盛んに応用している。例えば、『一八四〇年以前的中国基督教』(学苑出版社、2004年)において、鐘鳴旦(Nicolas Standaert)は、類型学によって徐光啓を含む中国文人信徒に対して分析を行っている。また、「社会轉型与信仰轉向——対徐光啓帰依天主教的宗教社会学考察」(『維真學刊』2003年第四期)において肖清和は、宗教社会理論によって徐光啓の

帰依の動機とその過程を考察している。ただし、理論の紹介と分析に偏重し、史料の利用範囲や、その解説には検討の余地があると思われる。